

昭和16年7月1日 第一種郵便物認可
平成19年12月1日発行 1冊140頁 1冊140頁
発行雑誌 沖 第38巻第12号



俳句雑誌「おき」

12
月号

沖
発行所

淡海

能村 研三

「なづな」の学園

近江七句

秋 寂 び て 湖 の 小 舟 の 二 人 立 ち

幻 住 庵 門 の 身 丈 の 露 雫

秋 虹 の 根 より 淡 海 の 冷 え を 呼 ぶ

叡 山 へ 国 の 境 の 片 時 雨

能村登四郎と林翔先生が長年勤務し、私の母校でもある市川学園が創立七十周年を迎えた。

母校といっても、時代と共に次第に疎遠になつてしまふものだが、一昨年市川学園の校庭に「登四郎・翔・耕二の三師句碑」を建立したので、まきつかけに学園との関係が急速に深まることになった。

現在では、同窓会の役員などを引き受け今回の記念事業においてもいろいろ関わらせていただいた。

父が教鞭をとつたころ、そして私が在校した時は歴とした男子高校であったが、数年前少し離れた所に新校舎が落成してからは、男女共学となった。長年男子校というイメージが浸透しているので最初は戸惑いもあったが、何度か行っているうちに女子の生徒がいることに何の違和感も感じなくなった。

市川学園は、昭和十二年に古賀米吉先生によつて創設された。

そして建学の精神の一つに「よく見ればの精神」を掲げている。つまり「一人ひとりをよく見る教育」と言うことで、芭蕉の、
へよく見ればなづな花咲く垣根か

夕時雨湖垣間見し仰木越え

漕ぎ出でて舳を見廻る鮫舟

丈艸の墓小さくて秋惜しむ

安住の距離感たもつ浮寝鳥

菊花展その裏側の薬缶酒

タイプンを小筥に収め風邪心地

な」という句を引き合いに出して、
「よくよく見れば、雑草のかすかな花にも、他の花と比べることができない独自無双の美しさがあり、生徒一人ひとりに光をあてて、じっくりとよく見る」精神が、生徒の潜在している能力を引き出し、開発し、進展していくもの」として教育の根幹をなすとしている。
そんなことで学園祭も「なづな祭」という名前がつけられている。
登四郎は創設の翌年から赴任している。古賀米吉先生と共に学園の運営に関わっていたので、生きていたなら七十周年を迎えた学園に特別の感慨があつたに違いない。

能村 研三



神無月

林 翔

師 走

陰曆十月一日

拍^{かし}手^はで や 神 在 さ ず と も 高 ら か に

皇后誕生日(十月二十日)

菊 香 る 「 地 久 節 」 と は 言 は ね ど も

教 へ 子 と い ふ も 白 髪 文 化 の 日

栗 一 つ 拾 ひ わ が 手 も 丸 く な る

十二月を何故「師走」と言うのだろう。小学生の頃は次のような俗説を信じていた。年末で忙しいから、普段はおっとりしている先生方も忙しく走りまわるというのである。

「歳果つ」が「としはず」に変わり、更に「しはず」に変わったのだと知ったのは、中学生になってからだと思う。現代仮名遣いでは「しわす」となる。

それにしても、「シ」と発音する漢字は無数にあるのに、「師」が選ばれたから俗説を生むようになったのであろう。「師」には「僧侶」の意味もあるが。

『沖歳時記』で「師走」の例句を見たら、

風呂敷てふ

やさしきものの師走かな

登四郎

という名句があった。近頃は風呂敷の出番も少なくなったが、以前は、

輝きにさびしさもあり木守柿

夕日さすいみじき角度金木犀

乾く血に似たり傷ある櫨紅葉

灯を消さば月に静脈浮き立つや

寝返りのわが身重たしつづれさせ

友は旅に吾は病床に秋時雨

外出には無くてはならぬ物だった。大きな物も小さな物も包める便利さもあった。それにしても「風呂敷でふやさしきもの」——登四郎でこそ表現であろう。

そのものずばり「十二月」も勿論季語である。

巨き手に背な押さるごと十二月

小暮桂千

「極月」(ごくげつ)という強い響きを持った言葉も、やはり十二月のこと。

男手のなき極月の松葉掃く

広瀬直人

は、近所の未亡人を詠んだのであるか。

林 翔



蒼茫集



晩稻刈る

森岡正作

試着

長谷川鉄夫

身に入むや波郷語るに酒こぼし
日本の顔とて富士の秋澄めり
モディリアニより秋声を聴かむとす
幾年も変らぬ 轍 晩稻刈る
戸口までにここに満月ついて来る
胸襟を開きて釣瓶落しかな

生れさうな

辻美奈子

月の夜を出て馬身めくオートバイ
をさなごの歌の出鱈目くさもみぢ
しるながすくぢらのごとき秋暑かな
上洲の南瓜槌もてかちわれよ
長き夜を俳神が来て詠めといふ
桃匂ふそろそろ赤子生れさうな

試着衣に秋の温もり貰ひけり
硯洗ふ墨の香に父偲びつつ
竹林の隙を貫く秋の日矢
受話器より朝寒貫ふ耳朶と頬
帰郷せり秋の紅芽の直中に
丹精がほころび初めし菊の鉢

カーナビ

北川英子

水銀柱一夜にちぢみ秋澄めり
墓所への道蓼の花など摘み加へ
カーナビにちよつと逆らひ秋夕焼
振り向かぬまま月明の後ろ影
凭れ合ふ暮らしほろほろ実むらさき
霧湧くや海図の暗礁このあたり

霧 甕 酒本八重

噴煙のさだかならざる霧の中
たちまちに霧甕となる湖一つ
晩婚の姉さまかむり花八手
お六櫛買うて芒の枯れにけり
神留守のなべて装飾品の綺羅
未だ名を持たぬ草庵雁渡し

秋の滝 大畑善昭

ホップ引く青空に刃を少し入れ
秋の滝仰ぎたましひのみとなる
桜湿地なら酢味噌にて食すが可
西国に空海のある秋日和
高原の 대기大根太らす
青みかん子が世に一書出すと言ふ

感謝状 辻直美

感謝状上げたき人と花野かな
星屑の殖えて唐黍ふとりたる

ふたりゐて境界線のある秋灯
血管のほそし細しと曼珠沙華
新米の二合のほかは残りもの
ミス案山子ミスター案山子選ばれる
仁 術 上谷昌憲

版ずれのごとく日が差す曼珠沙華
芒描く鉛筆は2Bがよろし
マジシャンが時止めてゐる敬老日
月光を貼り終へてビル竣工す
運動会きらきらひらく遊戯の輪
仁術祝館長長寿の系譜三代小鳥来る

オルガン坂 安居正浩

よく揺れてオルガン坂のねこじやらし
曼珠沙華もう大厄になれぬ齡
空揚げトランプの花ならば
中年の果ては老人草の花
すすき原貨車棒となり紐となり
爽涼や福耳だけを子に残す

潮鳴集

連結音

宮内とし子

連結音がちやりと釣瓶落しかな
水替へて秋の金魚に風生るる
身に入むや名刺に小さく再生紙
暗闇に歩き出すかも藁ぼつち
撫でられて顔を失ふすすき原

金の針

栗原公子

秋澄むやかからまつ金の針降らせ
思ひ出を卵のやうに抱く夜長
忘れたきこと埋めにゆく芒原
台風来少しわくわくしてゐたり
秋の日を透く蜂蜜のガラス瓶

探究派

林 昭太郎

いわし雲詠んで人間探究派
菊膾涙もろきは家系にて
朝礼の列は背の順鳥渡る
白桃の傷白桃を傾くる
案山子には過ぎて雅な目鼻立ち

弾力

鈴掛

穂

真つ直ぐに地熱を吐けり曼珠沙華
弾力を草に残してぼつた跳ぶ
どの橋もまなかに峠鳥わたる
鶏頭の隆々たるをおそれけり
一刷毛の風にも応へ秋ざくら



沖作品



能村研三選

下敷のうらの九九表小鳥来る

茨城

内山 花葉

喪の家の今朝上げてあり秋簾

草の絮ふはりと試歩の杖さそふ

ふるさとの戸を打つ音も雁渡し

母のもの羽織りて秋の深みけり

複写機の光こぼるる無月かな

風は秋白き夜景の副都心

糊しろのやうなる九月尽きにけり

洗礼を受けしか白き曼珠沙華

柚子青く匂ふこれからこれからと

瓢箪の趣きくびれ次第かな

大根蒔く未来あらうとなからうと

一生の途中の一献今日の月

木綿もの手熨斗畳みの九月かな

一鍬のがばと土嚙み水落す

大分

吉武 千束

東京

小嶋 洋子

ピカソ展出でて秋暑の雲ゆがむ

星飛んで虚空の闇を深くせり

胸もとに日向の匂ふ花芒

鱚雲網目ほつれて沖へ展ぶ

敗将の墓に寄り添ふ鬼やんま

爆音に寂たり基地の曼珠沙華

寧ろ詩を釣つてゐるらし鯨日和

新酒酌むにも蘊蓄のありにけり

星飛んで何かが胸に突きささる

研ぎあげし小太刀匂へる秋日かな

天高し雇用延長制度です

黒豹の尻尾に磁力秋の雷

この岬の先はサハリン鳥渡る

言ひ難きことはメールで草の花

今もなほ住所に字や稲の花

東京

七種 年男

神奈川県

堀口 希望

愛知

三好千衣子

沖作品 15句選評

*
能村研三

喪の家の今朝上げてあり秋簾

内山 花葉

普段から日常的に通い慣れた所にある家々、何も無いときは何気なく通り過ぎてしまうのだが、その家に不幸があった時などは、ちよつとした家の雰囲気、気配といったものでそれを感じる。普段閉まりきっている玄関のドアが開け放たれていた、掲句のように簾を巻き上げていたりする変化にも何か敏感に感じるものがある。「どなたが亡くなったのかしら」と思いつつ、失礼にならない範囲で奥を覗きこんでみた。簾は夏の季節だが、秋簾には名残の気持ちがあつて別離の情といったものも感じられる。

糊しろのやうなる九月尽きにけり

小嶋 洋子

「糊しろ」の句とうとすぐに思い出すのが、岡崎るり子さんの「鯛焼にある糊しろに似たるもの」の句だが、この句はその句とは違った味わいがある。「九月」という月は、夏が終わってもまだ暑さが残りつつ、本格的な秋へ向けた繋ぎの役割を果

たす月でもある。俳句的には「十月」よりも「九月」とか「十一月」といった、谷間に人り込んだ月の方が何か趣きがあつて詠むのも面白い。

一生の途中の一献今日の月 吉武 千束

中秋の名月の見事な月を觀賞しているうちに、月見酒を一献いただくことになった。普段あまりいだけない日本酒をぐい呑みで一杯だけちびちびとやりつつ、ペランダから庭を眺めていたのであるうか。風が揺らす木々のざわめきと虫の声を聞いているうちに本当に幸せな気持ちになった。今まで歩んできた来し方を振り返りつつ、「今は一生のうちどの位の位なのだろうか」と思つたり、これからの人生のあり方も考える瞬間でもあつた。

鯛雲網目ほつれて沖へ展ぶ 三好千衣子

鯛雲を仰ぎ見ていると遠い昔を思い出すような、遙か未来へ連れて行かれるような不思議な気持ちになる。鯛雲は小さな白雲が魚の鱗模様のように集まつて見える巻積雲で、鯛の群や魚の鱗と見えたりするのでこの名がある。この雲が見られると鯛が大漁という言い伝えもある。そのかたちは網目がほつれて、遙か沖の方まで広がって見えた。

寧ろ詩を釣つてゐるらし鯨日和 堀口 希望

諧謔味のある面白い句である。鯨釣りに来ているのに、釣りに集中しないのか、それとも釣果が乏しくあきらめてしまったのか。むしろ詩作り、俳句作りが気になってしょうがないのである。俳句も素材をいかに釣り上げてどう表現するかが勝負である。俳句に夢中になったが故の皮肉な現象でもあろうか。